



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	トゥバ語の再帰
Author(s)	江畑, 冬生
Citation	北方言語研究, 8, 81-89
Issue Date	2018-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68729
Type	departmental bulletin paper
File Information	04ebata.pdf



トゥバ語の再帰 *

江 畑 冬 生
(新潟大学)

1. はじめに

トゥバ語の再帰接辞がカバーする意味は、一見すると広範囲にわたっている。本稿ではトゥバ語の再帰接辞の用法を「再帰」「逆使役」の2つに大別することで、その意味的特徴・形態統語的特徴をうまく整理できると主張する¹。以下において特に出典の無い例は、筆者が実施したフィールドワークまたは筆者の作成したコーパスから得られたものである²。なお以下では、再帰接辞とそのグロスを太字で示す。

2. 再帰接辞の形態

トゥバ語の再帰接辞は、動詞語幹に付加される派生接辞である。再帰接辞には3つの形態素があるが、これらの使い分け条件については、先行研究でも筆者の調査でも分かっていない。表1に示すように、同じ語幹に異なる形態素が付加し意味的差異を生むケースもあれば、同一の形態素が多義であることもある。従って本稿では、接尾辞-*(i)n*、接尾辞-*din*、接尾辞-*(i)tin* の3つ（トゥバ語の接尾辞は一般に母音調和等による異形態を有するが、ここでは代表形のみを示している）をまとめて単に再帰接辞と呼ぶ³。

〔表 1〕 3種の再帰接辞と再帰動詞の意味の（非）対応

元の動詞		再帰動詞	
<i>bil</i>	知る, 分かる	<i>bil-in</i>	感づく [再帰用法]
		<i>bil-din</i>	知れる [逆使役用法]
<i>nomču</i>	読む	<i>nomču-ttun</i>	読書する [再帰用法]
			読まれる [逆使役用法]

3. 再帰接辞の用法に関する先行研究での分類とその問題

表1でも部分的に示したように、トゥバ語の再帰接辞の用法は多岐にわたる。従来の研究の問題は、トゥバ語の再帰について意味的特徴だけを見た無関な細分化を行うか、ある

* トゥバ語はロシア連邦のトゥバ共和国を中心に分布するチュルク系の言語であり、その話者数は約 28 万人である。トゥバ語は膠着的な形態法を有する接尾辞型の言語である。本稿は日本語学会第 154 回大会（2017 年 6 月、首都大学東京）における口頭発表の内容に加筆修正したものである。2 名の匿名査読者からの極めて有益なコメントに深く感謝申し上げたい。本研究は、科学研究費「北東ユーラシアチュルク系諸言語の研究：分岐と接触の歴史的過程の解明」（課題番号 17H04773）による研究成果の一部である。

¹ 「つかむ」に対する「つかまる」のように、日本語にも再帰と逆使役が同形だと見なせる動詞がある。

² 筆者の作成したトゥバ語コーパス資料は、トゥバ語新聞 *Шын* 紙の電子版における 2012 年 10 月から 2015 年 1 月の記事を元に作成したものである。

³ 接尾辞-*din* と接尾辞-*(i)tin* の 2 つが無声子音に後続する環境で同音形式となる点も、再帰接辞の機能を形態の違いから分析しようとする試みが難しいことの理由の 1 つである。ただし短い接尾辞-*(i)n* による再帰動詞は、本稿の分類における再帰用法で用いられる傾向が強い。

いは周辺の用法を考慮に入れていない点にある。例えば Kuular (2007: 1173-1174) は、再帰接辞の用法を 7 つに分類している (reflexive proper, reflexive-possessive, reflexive-benefactive, autocausative, absolutive, passive, anticausative)。同じ著者は Kuular (1986) では、6 つ (再帰プロパー・受益・中動・受身・不定人称・動作の量的特性) に分類する。一方、Isxakov and Pal'mbax (1961: 285-289) では 3 つの用法を (自己再帰・間接再帰・再帰受身)、Anderson and Harrison (1999: 24) でも 3 つ (reflexive, passive, detransitive) の用法を認めている⁴。

第 1 節でも述べたように、本稿ではトゥバ語の再帰接辞の用法を再帰用法と逆使役用法の 2 つに大別する。第 4 節以降でも示すように、この分類は周辺の用法も考慮に入れたものであり、単に意味的特徴に基づくだけでなく両用法間の形態統語的な相違点にも対応する。

4. 再帰接辞の再帰用法

再帰用法には、中心的用法と周辺の用法が認められる。再帰用法の中心的用法は、「自分を」「自分の身体部位を」「自分のために」「自力で (=他の力を必要としない)」「自ら (の身体部位) を手段として」等である⁵。再帰用法では典型的に、再帰動詞の主語が意志的な有生物である。

- | | | | | |
|-----|---------------------|---------------------------|----------------------|----------------------------------|
| (1) | <i>bod-u-n</i> | <i>ču-n-up</i> | <i>al-dī</i> | 【自分を】 |
| | 自分-POSS.3-ACC | 洗う-REFL-CVB | AUX-PST | |
| | 「彼(女)は自分 (の体) を洗った」 | | | [Isxakov and Pal'mbax 1961: 289] |
| | | | | |
| (2) | <i>ol</i> | <i>arn-ī-n</i> | <i>savaŋ-na-n-dī</i> | 【身体部位を】 |
| | 3SG | 顔-POSS.3-ACC | 石鹸-VBLZ-REFL-PST | |
| | 「彼(女)は顔を石鹸で洗った」 | | | [Kuular (2007: 1173)] |
| | | | | |
| (3) | <i>ol</i> | <i>a't-tī</i> | <i>terge-le-n-di</i> | 【自分のため】 |
| | 3SG | 馬-ACC | 馬車-VBLZ-REFL-PST | |
| | 「彼(女)は馬を馬車につないだ」 | | | [Kuular (2007: 1173)] |
| | | | | |
| (4) | <i>buruu-vus-tu</i> | <i>min-n-ip =tur =men</i> | | 【自力で】 |
| | 罪-POSS.1PL-ACC | 分かる-REFL-CVB=AUX=1SG | | |
| | 「私は、自分たちの罪を認めている」 | | | |

(1)から(3)に示すように、再帰用法では対格目的語を保持することが可能である。次の(5)

⁴ Kuular (1986) による分類を原語のロシア語で示すと, *sobstvenno-vosvratnyj*, *zainteresovannost'*, *medial'nyj*, *stradatel'nyj*, *neopredelenno-ličnyj*, *količestvennaja xarakteristika dejstvija* の 6 つである。Isxakov and Pal'mbax (1961) による分類を同じくロシア語で示すと, *sobstvenno-vosvratnyj*, *kosvenno-vosvratnyj*, *vosvratno-stradatel'nyj* の 3 つである。

⁵ 先行研究の立場とは異なり、本稿では、再帰用法におけるこれらの意味的細分化はあくまで便宜上のものとする。

(および後に示す(10)(11))のように、自動詞にも再帰接辞が付加しうる。つまり再帰用法では、項の増減を必ずしも伴うわけではないことが分かる。

- (5) *xün čurum-u-nuŋ plan-ĩ yozugaar xemčeg-ler čoru-ttun-ar*
 日 日課-POSS.3-GEN 計画-POSS.3 従って ノルマ-PL 行く-REFL-AOR
 「日課の計画に従って、ノルマが（自力で）進行していく」

再帰用法には2つの周辺の用法がある。その1つを本稿では「対象欠如」と呼ぶ。対象欠如の再帰動詞は、意味的には他動詞的であるが、(6)のように実際には対格目的語を欠く。ふつうは有生物主語を伴い、恒常的に行う動作を表す⁶。ただし(7)のように、無生物主語が全く許されないわけではない。

- (6) *agaar-ga nomču-ttun-ar-ĩn-ga ĩnak =men*
 自然-DAT 読む-REFL-AOR-3-DAT 好き =1SG
 「私は自然の中で読書をするのが好きだ」

- (7) *bo maygĩn-nũŋ askĩ čöön čũk-če kör-n-ũp al-gan*
 この テント-GEN 口 東 方-DIR 見る-REFL-CVB AUX-PST
 「このテントの入り口は東の方に向いている」

Kuular (1986: 47) などの先行研究では、再帰接辞が付加しても元の動詞の語彙的意味と近いもしくは同一である場合もあると指摘されている。筆者が対象欠如と呼ぶ用法は、一見するとまさにこのような指摘が当てはまるように思える。ただし筆者の観察によれば、例えば同じく「着る」としか訳せない場合でも、単なる他動詞 *ket* が動作対象に着目するのに対し、対象欠如の再帰動詞 *ket-tin* は動作主に着目している。従って、(8)のように単なる他動詞が用いられる場合には「自分の手で縫った美しい服」のような動作対象を描写する表現と共起しやすいのに対し、(9)のように再帰動詞が用いられる場合には「華やかに」のような動作主を描写する表現と共起しやすい。

- (8) *bod-um-nuŋ xol-dar-ĩm =bile daara-p al-gan*
 自分-POSS.1SG-GEN 手-PL-POSS.1SG=INST 縫う-CVB AUX-PST
čaraš plat'e-m-ni ked-ip al-gaš ...
 美しい 服-POSS.1SG-ACC 着る-CVB AUX-CVB
 「私は自分の手で縫った美しい服を着て…」

⁶ 高島 (2008: 122) が指摘するように、再帰動詞が職業としての従事という意味を持つことがある。この点も、恒常的動作という観点から説明することが可能である。

- (9) *kuda salon-un-ga aniyak-tar kaas ket-tin-ip al-gaš*
 結婚式 サロン-POSS.3-DAT 若者-PL 華やか 着る-REFL-CVB AUX-CVB
 「結婚式会場では若者たちが華やかに着飾って…」

本稿では再帰用法が持つもう 1 つの周辺の用法を「状況可能」と呼ぶ。状況可能は典型的に(10)や(11)のように否定形で現れ、主語に意志はあるが外的要因により行為を遂行できない状況を表すことが多い。加えて筆者の調査の限りでは、状況可能が肯定形で現れる場合には(12)のように反語を表す例のみが見つかった。

- (10) *kīlašta-ttīn-mas*
 歩く-REFL-NEG:AOR
 「[大雨で道路が冠水して] 歩けない」

- (11) *udu-ur de-er-ge udu-ttun-mas*
 眠る-AOR 言う-AOR-DAT 眠る-REFL-NEG:AOR
 「眠ろうとする時に眠れない」

- (12) *čaš kiži tud-up al-gaš kiži kayaa ažiḷda-ttīn-ar =boor*
 幼い 人 抱む-CVB AUX-CVB 人 どこ 働く-REFL-AOR=INFR
 「幼子を抱えながら、人はどこで働けるでしょう（どこでも働けない）」

ただし状況可能と言える例には、(少なくとも筆者の調査の限りでは)以下のような偏りが見られる。第 1 に、人称接語の付加した形は見つかっていない。トゥバ語では 3 人称の標示はゼロ形態になるため、(10)や(11)は 3 人称主語の文とも無人称文とも見なせる。第 2 に、動詞の屈折形式としてはいわゆるアオリストの形しか現れない。トゥバ語のアオリストは、意味的には未来または習慣に用いられる。第 3 に、状況可能の例の圧倒的多数は自動詞に再帰接辞が付加したケースである⁷。状況可能における例の偏りについては、本稿ではその指摘だけに留めておきたい。

5. 再帰接辞の逆使役用法

再帰用法が幅広い意味をカバーし意味的予測が困難であるのに対し、逆使役用法の意味は予測が容易である。すなわち元の動詞を含む節を「X が Y を V する」と定式化したならば、再帰動詞を含む節は「Y が V(REFL)する」のように示せる。

⁷ トゥバ語において動詞の自他の認定そのものが難しい問題である。仮に対格目的語を取りうる動詞を他動詞であると考え、状況可能の他動詞の 1 つの例が(12)の *ažiḷda* 「働く」となる。ただし対格目的語を伴う他動詞が、状況可能の用法で用いられる例はまだ見つからない。

- (13) *bo nom eki sat-tin-ïp=tur*
 この 本 良く 売る-REFL-CVB=AUX
 「この本は良く売れている」

- (14) *sadig kažan ažiit-tin-ar-ıl*
 店 いつ 開ける-REFL-AOR-WHQ
 「店はいつ開く？」

- (15) *respublika-da 28,235 hektar šöl-de sigen kes-tin-gen*
 共和国-LOC 28,235 ヘクタール 野原-LOC 草 切る-REFL-PST
 「トゥバ共和国では、28,235 ヘクタールの草原で牧草が刈られた」

以上の例が示すように、逆使役用法の主語は、典型的には無意志的な無生物だと言える。逆使役用法では対格目的語が現れることは無く、(意味上では想定できる)動作主を明示することもできない⁸。自動詞に再帰接辞が付加した場合には、逆使役用法にはならない。

逆使役用法では対格目的語が現れず、自動詞に付加することは無い。換言すれば逆使役用法では、再帰接辞の付加により必ず項構造が変わる。対照的に再帰用法では対格目的語を保持しうるし、自動詞にも付加しうる。つまり再帰用法では、再帰接辞が付加しても必ずしも項構造が変わるわけではない。

6. 後続しうる派生接辞の違い

どの派生接辞が後続するのかについても、再帰用法と逆使役用法は明確な相違を示す。第4節と第5節で述べたように、再帰用法では基本的に意志動詞を派生するが逆使役用法では無意志動詞を派生する。意志性における違いが、後続しうる派生接辞と関わっているようである。

まず、「～したい」を表す派生接辞-*ikse*や「～者」を表す派生接辞-(*i*)*kči*は、再帰用法の場合にのみ後続しうる⁹。

- (16) *kaš doozukču ööre-n-ikse-p tur-ar-ıl*
 いくつ 卒業生 学ぶ-REFL-VOL-CVB AUX-AOR-WHQ
 「何人の卒業生が学びたがっているのか？」¹⁰

⁸ Dixon and Aikhenvald (2000: 7) が指摘するように、(受身の場合とは異なり)動作主を表せない点が逆使役の1つの特徴である。

⁹ *sat-tin*「商売する／売られる」のように両用法を有する再帰動詞でも、派生接辞-(*i*)*kči*を付加した場合には *sat-tin-ikči*「購買者、売国奴」となり逆使役の意味は含まれず、派生接辞-*gir*を付加した場合には *sat-tin-gir*「(良く)売れる」となり再帰の意味は含まれない。

¹⁰ 再帰動詞 *ööre-n*「学ぶ」は使役動詞 *ööre-t*「教える」とペアをなしているが、派生接辞を取り去った部分 *ööre-* は自由形式ではない。

- (17) *čemne-n-ikči* 「飲食客」 *čaza-n-ikči* 「家具職人」
 食べる-REFL-ACTOR 鉋をかける-REFL-ACTOR

対照的に「～しやすい」を表す派生接辞-*gir* は、逆使役用法の場合にのみ後続しうる¹¹。

- (18) *bo aytirig-ga xariü bil-din-gir*
 この 質問-DAT 答え:POSS.3 分かる-REFL-POT
 「この質問への答えは分かりやすい」

使役接辞との相互承接についても、再帰用法と逆使役用法は相違点を示す。トゥバ語の使役接辞には *-(i)t*, *-ir-gis*, *-dir* などいくつかの形態素がある。これらのうち再帰接辞に後続しうるのは、*-dir* のみである。表 2 に示すように、使役接辞は再帰用法には後続可能だが、逆使役用法には後続する例が無いことが分かった。

〔表 2〕 再帰接辞と使役接辞の連続

	再帰用法	逆使役用法
使役-再帰	<i>ayt-ir-tin</i> 「尋ねる」 ¹² (<i>< ayit</i> 「示す, 教える」)	<i>xan-dir-tin</i> 「満たされる」 (<i>< xan</i> 「満足する」) <i>tur-gus-tun</i> 「建つ, 出来あがる」 (<i>< tur</i> 「立つ」)
再帰-使役	<i>ču-n-dur</i> 「洗わせる」 (<i>< ču</i> 「洗う」) <i>boda-n-dir</i> 「熟考させる」 (<i>< boda</i> 「考える」)	---

7. まとめ

本稿ではトゥバ語の再帰接辞の用法を「再帰」「逆使役」の 2 つに大別することで、一見すると広範囲をカバーするトゥバ語の再帰接辞の機能に関して、意味的特徴・形態統語的特徴の両方をうまく整理できると主張した¹³。2 つの用法の違いを表 3 に示す。

表 3 に示すように、トゥバ語の再帰接辞の両用法は意味的にも形態統語的にも異なる特徴を示す。再帰用法では、対格目的語が保持されることがあり、自動詞からの派生が可能である。つまり再帰用法では項構造は必ずしも変わるわけではない。一方で逆使役用法では、対格目的語を保持できず、自動詞からの派生も不可能である。つまり逆使役用法では

¹¹ 類義の派生接辞-*čak*「～しやすい, ～しがち」は、逆使役用法だけでなく再帰用法にも後続可能である：*mogat-tin-čak*「いつも駄々をこねる (子供)」。

¹² 使役動詞 *aytir*「尋ねる」はクイズの場合にも用いることが可能だが、そこから派生した再帰動詞 *aytir-tin*「尋ねる」は、道を尋ねる場合など尋ねた結果として動作主の利益となる場合にのみ用いる。

¹³ 言語類型論の立場から再帰を扱った主な文献には、Geniušienė (1987), Kazenin (2001), Dixon (2012: 138-196) などがある。Kazenin (2001: 920) は、再帰マーカーがしばしば多義的である (polysemous) ことを指摘する。この指摘はトゥバ語の再帰にもあてはまるものである。

項構造が必ず変わると言える。主語の有生性と動作の意志性に関しても、両用法には違いが見られる。再帰用法は2つの周縁的用法を持つこともあり、意味的な予測が困難である。一方で逆使役用法では、再帰接辞は極めて意味的に透明である。後続可能な派生接辞についても、両用法の間には明確な相違が見られる。

〔表 3〕 トゥバ語再帰接辞の2つの用法の違い

	再帰用法	逆使役用法
対格目的語保持	可能	不可
自動詞からの派生	可能	不可
再帰動詞の主語	典型的には有生物	典型的には無生物
動作の意志性	典型的には意志的	無意志的
意味的予測	困難(「対象欠如」「状況可能」含む)	容易
後続可能な 派生接辞	-(i)kse 「～したい」、-(i)kči 「～者」、 -dir (使役接辞)	-gir 「～しやすい」

江畑 (2016) では音韻的・形態統語的な根拠に基づき、サハ語における同音形式の再帰接辞-(i)n と逆使役接辞-(i)n を形態素レベルで区別している。これに対しトゥバ語の再帰用法と逆使役用法は、あくまで用法レベルの区別でしかない。管見の限りでは、ユーラシア大陸の東西に広がる 30 余のチュルク諸語の中で、トゥバ語の再帰が最も広い意味領域をカバーしていて生産性も高い¹⁴。その一方で、トゥバ語の受身接辞の用法は極めて限られており、ほぼ逆使役専用の接辞になっている。チュルク諸語全体における再帰接辞の位置づけと、トゥバ語のボイス体系における再帰の位置づけについては、今後の課題としたい。

略号

ACC 対格, ACTOR 行為者派生, AOR アオリスト, AUX 補助動詞, CVB 副動詞, DAT 与格, DIR 向格, GEN 属格, INFR 推測, INST 具格, LOC 処格, NEG 否定, PL 複数, POSS 所有接辞, POT 可能性, PRS 現在, PST 過去, Q 疑問, REFL 再帰, SG 単数, VBLZ 動詞派生, VOL 願望, WHQ 疑問詞疑問

参考文献

- Anderson, Gregory David and K. David Harrison. (1999) *Tyvan*. München: Lincom Europa.
 Boeschoten, Hendrik. (1998) Uzbek. Lars Johanson and Éva Ágnes Csató. (eds.) *The Turkic languages*. 357-378. London: Routledge.
 Clark, Larry. (1998) *Turkmen reference grammar*. Wiesbaden: Harrassowitz.
 Dixon, R.M.W. and Alexandra Y. Aikhenvald. (2000) Introduction. R.M.W. Dixon and Alexandra Y.

¹⁴ トルコ語やウズベク語では、再帰接辞の生産性が低いことが指摘されている [Göksel and Kerslake (2005: 76), Boeschoten (1998: 364)]. トルコ語やトルクメン語では、再帰接辞は基本的に他動詞にしか付加しない [林 (2013: 166), Clark (1998: 532)]. ただしタタール語、サハ語、「マナス」のキルギス語では、自動詞に再帰接辞が付加する [Salo (2013), 江畑 (2016), Ohsaki (2008)].

- Aikhenvald. (eds.) *Changing valency*. 1-29. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dixon, R.M.W. (2012) *Basic linguistic theory. vol.3. Further grammatical topics*. Oxford: Oxford University Press.
- Dorzhu, K.B. (2013) *Kategoriya zaloga v tuvinskom jazyke*. Kyzyl: Tuvinskiy gosudarstvennyj universitet.
- Geniušienė, Emma. (1987) *The typology of reflexives*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Göksel, Aslı and Celia Kerslake. (2005) *Turkish. A comprehensive grammar*. London/New York: Routledge.
- Isxakov, F.G. and A.A. Pal'mbax. (1961) *Grammatika tuvinskogo jazyka. Fonetika i morfologija*. Moskva: Vostočnoj Literaturny.
- Kazenin, Konstantin I. (2001) Verbal reflexives and the middle voice. Martin Haspelmath, et al. (eds.) *Language typology and language universals. vol. 2*. 916-927. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Kuular, K.B. (1986) Vozvratnyj zalog v tuvinskom jazyke. *Issledovanija po tuvinskoj filologii*. 33-52.
- Kuular, Klara B. (2007) Reciprocals, sociatives, comitatives, and assistives in Tuvan. V.P. Nedjalkov. (ed.) *Typology of reciprocal constructions*. 1163-1229. Amsterdam: John Benjamins.
- Ohsaki, Noriko. (2008) The functions of reflexive verbs in Kyrgyz language used in the Manas Epos. Fujishiro Setsu and Shōgaito Masahiro (eds.) *Dynamics in Eurasian Languages*. (CSEL Series 14). 1-29. Kobe: Department of Human Science Studies, Kobe City College of Nursing.
- Salo, Merja. (2013) Deverbale reflexive and passive in Chuvash. *Journal de la Société Finno-Ougrienne*. 94, 223-254.
- 江畑 冬生 (2016) 「サハ語の再帰接辞・逆使役接辞・受身接辞」 『北方言語研究』 第6号, 43-52.
- 高島 尚生 (2008) 『基礎トゥヴァ語文法』 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 林 徹 (2013) 『トルコ語文法ハンドブック』 白水社.

Reflexive in Tyvan

Fuyuki EBATA
(Niigata University)

Tyvan reflexive voice has a seemingly wide range of use. This paper divides the Tyvan reflexive into two uses: reflexive and anticausative. This classification is not only based on the semantic properties of the reflexive but also corresponds to its morpho-syntactic behaviors. In reflexive use, the reflexive suffix can be attached to an intransitive stem,

and the clause may have an accusative NP as its direct object. The derivative verb is not semantically predictable from the base, since it covers non-prototypical meanings such as “patientless” and “possibility.” In anticausative use, in contrast, the reflexive suffix cannot be attached to an intransitive stem, and the clause never has an object in the accusative case. The resultant verb is semantically quite transparent, and its meaning is highly predictable based on the base verb. The two uses are also different when it comes to possibilities of derivational morphology: a volitional, an actor nominal, or a causative suffix can follow the reflexive suffix in reflexive use, while a potential suffix can follow the reflexive suffix in anticausative use.

(えばた・ふゆき ebata@human.niigata-u.ac.jp)